

亀岡市 木下 雅子（83歳）

引揚げの記憶

1946年1月、冬のある日、下着を三重に、その上にセーターとカーディガンとジャケットにオーバー。靴下は三重に履き、二回り大きいサイズの靴を履き、教科書と学用品を背中のランドセルに一杯つめて小学2年生の女の子は両親と一緒に中国青島（チンタオ）の埠頭に立っていた。これが私の姿である

夜の明けない朝6時、日本に引き揚げていくために、7年間過ごした我が家を出た。その空き家へ入れ替わりに原地の人が目ぼしい品物を探しに土足で入ってきた。それから馬車に乗って埠頭へ向かった。岸壁に停泊している大きなアメリカの貨物船に乗船するためである。

風の吹く埠頭の仮設テントで引揚げを待つ人々は順番に身体検査を受けた。検査に合格すれば乗船が許可される。乗船者全員の検査が終わって2日目に船は汽笛を鳴らして出帆して、黄海を東に走り出した。船の中は足の踏み場もなく船底の鉄板の上に布を敷いてほぼ1週間を起居した。食事は家族毎に、ボールのような器を持って配給所に並んだ。

航海中、玄海灘でよく揺れた。船内のあちこちに嘔吐用の器が備えてあった。また、亡くなった人がいた。海の上では板に乗せて海へ水葬をした。子ども心に記憶に残っている。航行して数日たったころ「島が見えた！」という声で船内は活気づき、大勢の人が祖国日本を見ようと甲板へ急いでのぼった。

日本では、九州長崎県佐世保に入港した。大型貨物船は湾の外で停泊し、海の上で上陸用舟艇に小分けにして乗り移った。日本に到着して直ぐ身体検査でなく、殺虫剤による防疫チェックであった。大きい噴霧器で白い粉を首筋から背中にふきこまれた。そして、ぎゅうぎゅう詰め引揚げ者収容所へ入っていった。2日後ぐらい手続きが終わって引揚げ列車に乗って京都駅に着いた。京都の家はあった。私の76年前のことである。